

ニセコのミライを、彩る仕事

～多様な人々が暮らすまちで、住民の暮らしを色鮮やかに
人とかわる、地域を支える、未来を考える

北海道ニセコ町は、5,000 人規模という小さな自治体では珍しく、人口が微増し、今後も人口維持が見込まれています。世界的にはパウダースノーが有名で、インバウンド経済の象徴のようなリゾート地としてメディアでは取り上げられることが多い一方、住民自治と情報公開のまち、持続可能な農業を大切にしている農村です。

そんなニセコ町では、近年、SDGs 未来都市として「環境を生かし、資源、経済が循環する自治のまち」を目指しています。同様に、多様性を重視しているニセコ町では、町役場においても社会人経験者採用や民間企業からの出向など、多様で幅広い視点を取り入れた行政組織を形作っています。

今回は新卒でニセコ町役場に就職し、企画環境課経営企画係の C さんにお話を伺いました。

本日のインタビューでお話を伺った方

愛知県出身。2020 年に入庁。建設課、企画環境課、総務課を経て、2 年間地域活性化センター（東京）に出向し、現在、再び企画環境課に在籍。親が北海道出身だったこともあり、大学受験を機に北海道へ。子どもの頃からお金のためではなく、人のため、公共のために働きたいと考え公務員を希望。スノーボードが好きで、ニセコエリアに好感を持っており、最終的に就職はニセコ町役場を選んだ。

ニセコ町役場で働くってどんな感じ？

ーニセコ町で働き始める前に感じていた期待と、働いてみてのギャップはありますか？

私自身、大学で教員免許を取得していましたので、自治体にも教育委員会などがあるし、子ども・教育関係の仕事ができればいいなと漠然と想像していました。しかし実際に就職してみたら、役場内には自分の想像以上に様々な仕事があることに驚きました。仕事を始めてからこれまで教育分野以外の係に配属されていますが、どんどん異動して幅広い経験をさせてもらっていることが、自分の知識や経験の幅が広がって良いと思っています。教育に関われなくて残念というより、「最終的にいつか携わることができたら良いかな」くらいに思っています。



写真：C さんがスノーボードを楽しむ町内のスキー場から羊蹄山を望む。スキーゲレンデに立つと、自身の目線より標高が高いはずの羊蹄山を見下ろしている錯覚がして、吸い込まれそうになるのも魅力

―職場での経験で良かったことや苦勞したことはありますか？

しんどかったことはそれほどなく、楽しくやらせてもらっています（笑）。あ、困ったことは地元出身ではないので、「どここのだれだれだ〜」と名乗られても、その方のことを知らなくて…。（田舎なので）地元の役場であれば、誰でも当然ご自身のこと、お住まいを知っているという前提でお話しされる方も多く、それに対応するのは慣れるまで困りましたね。

良かったことは、地域活性化センターへの出向中の2年間は、学ぶことが多く貴重な経験だったと感じました。出向先は、職員の8割程が各自治体からの派遣職員で成り立っていて、様々な自治体に出向いて研修を行ったり、先進事例を学んだりする機会が多かったので、ニセコ町と比較してどんなことがニセコ町で実現できるか考えることができて、とても楽しく、勉強になりました。

地域活性化センターとは？

正式名称は一般財団法人 地域活性化センター。創立40周年を迎えたセンターは、全国の地方自治体（都道府県や市区町村）と民間企業が共同で設立した一般財団法人で、地方創生やまちづくりを担う人材の育成、各種情報の提供、助成金などを通じて全国の地域振興をサポートしています。

―役場で働く面白さは何でしょうか？

行政の仕事を通して住民との関わりが多くあるので、様々な人と話したり、困りごとを聞いたり、イベントなどで来てくれた人たちが楽しんでいる様子を見たりするとやっていて良かったなと思います。今はふるさと納税を担当していて、数字に目が行きがちな業務ではありますが、金額以上に、地元商品の魅力をどのように伝えられるのかを考え、企画していくのが面白いです。



ひとつの仕事がまちの色になる - 役場の仕事

―業務の中で、自分で判断・提案する場面はどのくらいありますか？

課や係ごとに異なるという側面もありますが、上司の対応力でも差は出てくるのかなと思います。慎重な方だったりすると判断に時間を要することもあるかと思いますが、これまでの自分の経験した部署は恵まれていて、自分の提案や判断に柔軟に対応してもらえたので、提案したことは割とすんなりやらせてもらっています。

自分が提案したエピソードでは、総務課防災係の時に、既存の防災作業着の色が明るく、作業で使用した際に汚れが目立って手入れが大変だったため、濃い色を提案したところ、防災作業着のデザインを見直し変更することになりました。こうした日常の提案が実現するときにやりがいは感じます。

―上司との距離感、意思決定のスピード感はどう感じていますか？

上司との距離感は近いし、スピード感は早いと思います。相談すれば、すぐに返答がくるし、難しい案件であっても、あれはどうする、これはどうすると色々調べた上で相談すれば、棚上げされるという感じではないです。



―「任されている」と感じた具体的なエピソードはありますか？

JR ニセコ駅から中央倉庫までの約 100 メートルの道には（見通せることもあって）これまで表示の掲示がなかったのですが、「看板があったほうが良いよね」という話になったとき、その業務を任されました。業者に一括して依頼する方法もあると思いますが、丸投げでの委託はせず、自分自身でデザインして作ったことでやりがいもありましたし、その道を通る度に「これを自分が作ったんだな」という気持ちになります。仕事には大変なこともあります。役場の仕事は形にできることも多いので、やりがいしかないと言っていると思います。

―プレッシャーを感じる場面はありますか？

ひとりで抱え込むようなプレッシャーは全くないです。人の命に関わる事業や何億円規模の案件だと違うと思いますが、現状はそこまで重い案件を単独で担当していないこともありますし、挑戦を恐れずにミスをしてカバーすれば良いと思っているので、とても楽しく仕事ができています。

こんな人と働きたい

―ニセコ町役場に向いている人はどんな人だと思いますか？

柔軟な対応力が求められる仕事だと思います。行政の仕事は、法律など遵守しなければならない事柄によって自分の思うように仕事ができない部分はありますが、そういう中でも自分で、柔軟に考えて行動できることが必要だと思います。

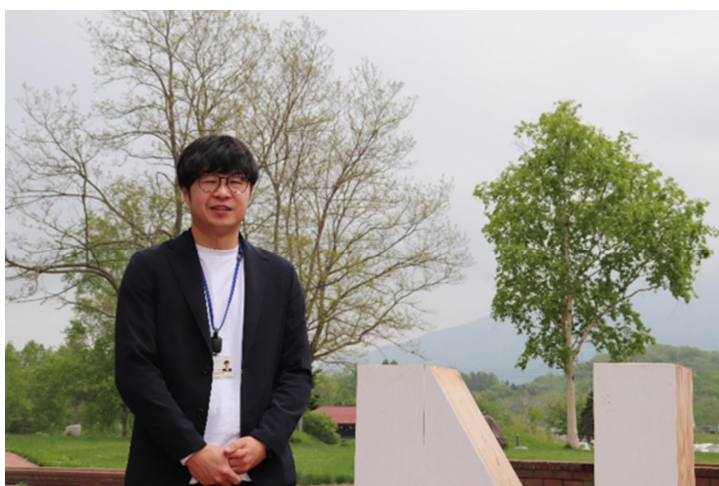
それ以外にも、コミュニケーションも重要ですね。住民とのコミュニケーションもさることながら、職員間のコミュニケーションがうまくいかないと信頼関係が築けません。信頼や協力する関係が築けないと自分の仕事に影響が出てくるので、重要だと思います。



写真：今回、インタビューを行った有島記念館。有島武郎は1922年、北海道ニセコ町にあった自身の「有島農場」を小作人に無償解放し、「相互扶助」という言葉を遺しました。これは、思いやりと協力によって生きる社会を望んだ言葉で、今も町政の基本理念や地域づくりの根幹として大切に受け継がれています。

—どんな想いをを持った人に来て欲しいですか？

好奇心を持っている人に来て欲しいです！ 自分の専門分野だけでなく、専門外でも積極的に調べたり考えたり、動けたりできるような、好奇心ある方は必要とされています。



—未来の世代に対する期待や想いを教えてください。

その時代に合わせてアップデートできるような組織が良いと思っているので、前例主義もわかるし、それも大切ですが、それプラス α みたいなところを考えられる組織になれば。問題はあるし、リスクもあるけれど、それをどう解決すればいいのかというポジティブな考えを持った同僚たちと頑張っていきたいと思っています。